

---

# BLADE 4 『リトルブレイバー』

月島 真昼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLADE 4 『リトルブレイバー』

### 【Nコード】

N2441H

### 【作者名】

月島 真昼

### 【あらすじ】

かつて魔王を倒した英雄の1人、レグナは再び魔王が現れた世界を旅をする。

（前書き）

# & \* @ §

半熟震術師 リース

1人の力で救える人間の数なんてたかがしれてるんだよ 機工技師 怠け者のリトル

さて、光の術者と言ったな？ 王国最強の震術師 スティア

あんたには指一本触れさせん B L A D E

わ…私は悪魔の奴隷になどならんぞっ！ 第6守備部隊隊長 ベル・バークライト

あれ もしかして死んじゃいました？ 【限り無き炎】 ゼクウ・ファイアレス

ばちいつ!!!!

電流がはぜたような音でレグナは目を覚ました。  
いまは夜、レグナはテントの中に居る。リースはまだ静かに寝息を立てている。

レグナはテントの中を見渡す。灯りは切つてあるしそんな音を立てるような物は元々テントの中には存在しないはずだ。

と、なると可能性は1つしかない。

(外の……簡易結界が破られたか……!)

ウルスラグナを抜きテントを飛び出した。

そこには全身が赤く光る人型の悪魔が居た。

「いーこと教えてやろうか 剣士くん」

レグナを見て次にその武器に目を移して悪魔は薄く笑う。

「俺の血液は灼熱の温度だ 並の剣なんかを溶かしちまって効かねえぜ」

躊躇いなく踏み込んでレグナは悪魔を一閃した。

「バカが　せつかく忠告してやつ……た　の………に……？」

並の剣ならたしかに灼熱の温度に溶けてしまっただろう。だがそれはあくまで『並の剣』の話だ。

「悪いな、『ウルスラグナ』は普通じゃないんだ」

噴き出す灼熱の血液を回避すべくレグナは後ろへ跳んだ。

「はぁ………」

レグナ・ゼオングスは憂鬱だった。

朝、あたりが明るくなつてから簡易結界をきちんと調べてみたら見事にぶっ壊されていた……

「ヴァルクリフに技師が居ることを祈るしかないな」

簡易結界の値段は桁外れに高い……

下手をすればそれだけで家一軒を買ってしまったりする。

一介の旅人であるレグナとリースにそんな金があるはずもなかった……

「まあ、目的地に近かったのが不幸中の幸いか」

## 《ヴァルクリフ》

世界最大の結界を持つためその街は城塞都市と呼ばれ、その北にある王国の守りの要だ。

当然入国管理などもされているがレグナ達は武器を持ったままそれを容易にすり抜けた。

「バスターライセンス【破壊者の証】だ」

レグナが自分の鎖骨のあたりを示し門番がそこにある入れ墨のような物を認めた。ただそれだけで。

「ねえ ヴァルクリフってすごく審査が厳しいって聞いてたんだけど……」

門番から1つずつ手渡された小さな筒みたいなものを眺めてリースが首を傾げる。

「非常時だからな バスターはライセンスさえ示せばだいたいの場所に入りが許されてるんだ  
ただ発信器を手放すと直ぐに憲兵が飛んでくるぞ 風呂に入るときと寝るとき以外はその筒、手放すなよ」

「わかった」

「さて……久々の街だが、何かしたいことはあるか？」

「お風呂入りたい！」

「……だろうな 今日は休んで、動くのは明日からにするか」

逆ではないだろうか？ とリースは頭を抱えてみた。ちなみに彼女は既に湯上がりホカホカである。

【破壊者の証】を見せれば格安で泊まれたのだがそれでもお金の節約に2人で一部屋 というのは既に慣れているからあまり抵抗はない。

ベッドが1つしかない なんてお決まりのパターンも存在せずにフカフカの柔らかそうなベッドが2つ並んでいる。

彼女の頭を悩ませているのはそんなことではなかった。

レグナが、お風呂に入っているのだ。

これを、覗くべきか、覗かぬべきか……！

そんな葛藤をいざ知らずにレグナは湯にひたり呟く。

「限界、近いな……」

しばらくして、

「……………」

風呂場を出たところでレグナは困惑した。

「……何をやってるんだ リース」

レグナのそれは純粹に脱衣場で踞るリースを案じての物で決して他意はなかった。そこには一欠片の邪気も込もっていなかったのだが頭上から聴こえた声にリースは思わず顔を上げて、そこにはレグナの顔があり腕があり足があり胴体があり

「#&\*@§      」

リースは悶死したのだった。

翌日。あのあとリースが盛大に鼻血を噴いてぶっ倒れた、とかそんなことはおいとして、ともかく翌日。

「まずは道具屋を当たろうか    技師が居るなら紹介してくれるだろう」

完全に外敵の心配のない寢床は久々で昼まゆつくりと睡眠を取ってから二人は宿を出た。

レグナにある程度の土地勘があるらしくそう歩き回らずに道具屋は見つかった。

適当に買い物をしたついでと言った口調で訊ねたレグナに道具屋



の主人は快く答えてくれた。

「簡易結界の修理かい？ それなら『怠け者のリトル』を訪ねるといいよ 仕事は遅いが腕はたしかだ

あー 彼女、仕事が嫌いでも留守番を使うから10〜20分は粘る覚悟でノックするようにね」

「わざわざすまない」

軽く頭を下げてレグナは道具屋を出た。しかし違和感を抱いて振り返る。

「リース！」

「はひいっ！」

店の中で【よく効く媚薬】のコーナーを真剣な目付きで眺めていたリースが小さく飛び上がった。

こんこん

「リトルさん」

こんこん

「リトルさん 居たら返事してくれ」

こんこん

「リトルさん 居るんだろー？」

…… 5分経過

げしげしっ

「リトルさん 早くでやがれ」

…… 10分経過

ドンドン

「リトルさん 扉壊していいかー？」

…… 20分経過

「リース 下がれ」

「え？」

「叩き斬ってやる……！」

ガチャッ

「ちよつと君、人ん家のドアに何しようとして、………」

扉を開けて出てきたいかにもだるそーな言葉使いとだるそーな目

付きをした女とレグナは、お互いに何か理解不能なモノでも見たかのようにその場でフリーズした。

「……プレイ……バー……？」

呆氣に取られた口調でレグナが呟き、

だんっ！ カチ

……凄まじい勢いでドアが閉められ鍵がかけられた。

「ちょ……ちょっと待っててっ 化粧してくるからっ！」

あーもう髪型があ、あうっ ゴミ散らかってるし……… なんて来るなら連絡くれないんだよおっ！

……ドア越しにそんな独り言が聴こえてきたのだった。

「レグナ 彼女……知り合い？」

「ん……まあ 知り合いというか、なんというか……」

レグナは困り顔で後ろ髪を書く。

「あれが【銃の王】プレイバー だ」

……それは行方不明の『四人の王』の、1人に与えられた称号だった。

それから更に20分後

「お お待たせ……」

17〜8歳にしか見えない少女がおそろおそろと言った感じで改めてドアを開く。

伸びすぎな髪はとりあえず…… と言った感じでポニーテールにされていて前髪は前分けにされて頬が隠れている。荒れた肌の上に乱雑に化粧が乗っているがそばかすが隠れ切っていない。

だけどそれでも…… 美人、いや 160cmに少し届いていないリースよりも背の低い彼女には『かわいい』という表現のほうが正しいだろうか。

「……待たせすぎだろ」

レグナが呆れ切った顔をする。

「う……ごめん」

「はぁ…… 普通、昔の戦友を1時間近く玄関の前で待たせるか？」

口調と裏腹にレグナは楽しそうに、少なくともリースには見えた。

（む…… ライバル出現？）

そんなリースの様子に気付くはずもなく『怠け者のリトル』は眉に微妙に皺を寄せて、だけどその口元はやっぱり嬉しそうに背の高いレグナを見上げる。

「だからごめんって…… 散らかつてるけどとりあえず上がって」

…リビングに招かれて、二人は先ず困惑した。

床に埃が積もってる上に、なにやら室内が金属臭いのだ。足を前に進める度に何かの繊維や砂のような細かい粒子が舞い上がる……

「お前よくここで生活してるなあ……」

「住めば都だよ」

呆れ顔のレグナに微妙に用法が違う気がする諺を言い親指をぐつと突き上げて満面の笑みを浮かべるリトル。

そんな二人の様子にリースは内心おもしろくなかった。

（わたしといたら仏頂面なのに……レグナなんか楽しそう）

てゆうか……あれだ。

『銃の王』 つまり6年前の勇者の1人なら少なくともレグナと同じ年ぐらいのはずだ。

……すごく若く見えるのは気のせいだろうか？ どうかどうみても二十歳を越えているようには見えない。

「しつもん」

リースは手をあげた。

「んなに？」

柔らかい微笑を浮かべるリトル。その仕草はやっぱどこかに幼さがあるような気がする、と年下のクセにリースは思う。

「あんた何歳？」

「……いくつだっけ？ 今年で……1……8？」

ああそうそう18歳ね……じゃあ六年前はって、

「18歳っ?!」

「うん、多分」

なんてことのないようにリトルは頷くがベリアルを倒したときの年齢を逆算すれば、12歳ということになる。

「こいつが大戦に参加してたのが11〜12歳の時でたしか【小さな勇者】リトルプレイヤーって呼ばれてた、よな？」

「不本意だけど」

頷く。

（12歳でもう戦ってたんだ……）

「っーか……悪い 俺、お前のこと男だと思ってたわ」

「ガーン……」

ガックリ項垂れるリトルを横目にリースはレグナの死角で小さく

ガッツポーズを作る。

「にしても『リトル』ね 本名を名乗るのが嫌いなのは知ってるが……」

「え 偽名なの？」

「……名前訊かれて咄嗟に出ちゃったんだよ」

不服そうに口を尖らせる。

どうやら『リトルブレイバー』の前半部分を口走ったきり“リトル”を払拭出来なくなってしまうたらしい。

「いいんじゃないか、『リトル』 似合ってるぞ」

レグナがからかうとリトルは顔を真っ赤にした。

「うっ……あんまりだ」

キッ、と目付きを細くしてレグナをにらみつけるがその拗ねた顔付きがまた童女のようにで、

「ぶっ……」

レグナが嘔き出す。

「……笑ったね？」

リトルが言葉に怒気を孕ませる。

（！）

自身に向けられたモノではない、傍目のリースにもわかるほどの殺気

刹那、リトルが懷に手をやり、何かを抜き払うように動かした。

レグナは咄嗟に剣を抜いてそれを防ぐように構える。

（ウソッ……）

リースは戦慄した。

弾丸に近い速度のバオウの『水棲の蛇王（ダイダロス）』を見切り、

人間を遥かに超える身体能力を持つドレイクと互角の肉弾戦を繰り広げた、

『ブレイド』の防御よりも、

目の前の少女の抜き打ちは速かった。もしもそこから銃弾が発射されていたとすれば、レグナは確実に死んでいただろう。

「……腕は鈍ってないか」

少女の手に『何も握られていない』ことを確認してレグナは剣を納める。

「もちろん まあ僕はもう『破壊者』は引退したんだけどね」



「……！」

「この街は安全だし」

「っ……あんだ……戦える力があるのにどうしてっ！？　ここ以外に困ってる人はたくさんいるのにつ」

「1人の力で救える人間の数なんてたかが知れてるんだよ　レグナはどうか知らないけど僕はもう戦うのは嫌だ

【銃の王】だからって別にそんな義務もないしね」

「……それがお前の答えか」

「……うん」

「そうか」

レグナは頷いただけだった。

「あー……そうだ　簡易結界の修理ってどれくらいかかる？」

「簡易結界？　ちょっと時間かかるよ　3日は欲しいかな？　あ、君からお金は取らないから安心して」

「悪い、頼むわ　邪魔したな」

壊れた簡易結界の入った荷物をおろしてレグナは玄関へ踵を返す。  
リースはリトルを一瞥して、振り返りそのあとを追った。

「……腕は鈍ってない、か」

【銃の王】は呟く。

六年前に使用していた二挺の銃を手にして。

「レグナさん……？」

大通り。雑踏の中で名前を呼ばれた気がしてレグナは振り返った。

「やっぱりレグナさんだ　僕ですよ、覚えてないですか？」

軍服を着た少年が、その後ろに十数人の兵士を引き連れて片手をあげる。

「……ゼクウか？」

「貴様っ！」

「待って」

いきり立つ女の兵士の前に突きだし片手で制する。

「しかし、ゼクウ様！」

「ゼクウ様が 偉くなったもんだな」

「つつ……」

女が懷の劍に手をかけ、

「やめろって言ってるだろ？」

ゾツとするような冷たい目でゼクウは女を睨んだ。空気が熱を帯び、その影響で対流現象が視界を僅かに歪ませる。

（火炎系の震術！ それもすごい使い手だ……）

「す………すいません」

「うん、いいよ」

軍服の少年はあっさりと矛を納める。

「お前、その服……『大震』<sup>セイバー</sup>に入ったのか？」

「うん 去年からね」

「……『星の隷属者』<sup>アストラル</sup> もここに居るのか？」

「いますよ いまは多分、詰め所のほうに」

「丁度いいところであつた 会わせろ」

「構わないけど、珍しいね　あなた、彼のこと嫌いだったんじゃない？」

「まあ、な」

『セイバー 大震』という王国の一部隊がある。

構成人数はたった4人。しかしその名は『王国最強』と広く知られ、6年前の戦争のときも『四人の王』に匹敵する力を振るった部隊でもあった。

そして四人の頂点に君臨する術者が『星の隷属者　スティア・クロイツ・マグナビュート』だった。

が……

「……酷い有り様だな」

「笑いたいなら笑うがいい」

両手足に包帯を巻きベッドに横たわるがスティアが自嘲するように言う。

「いままで何をしてた？　『大震』は1人も魔王を倒す動きを見せていないらしいが」

「話したところで貴様のようない介の戦士にはわからん話だ」

「政治的な干渉か？」

「……くだらん」

「その怪我はなんだ？ 『王国最強の震術師』がどうしたってんだ？」

「……Secondを名乗る悪魔と交戦して、負けた」

「お前が?!」

「……で、貴様はなんのようだ？ 貴様に限りまさか見舞いではあるまい」

「あー、1ヶ月ほどいい 俺の連れを預かってくれ」

蚊帳の外に居たリースが凄まじい勢いで顔をあげる。

「……貴様が私を頼るなどという風の吹き回しだ？」

「『光』の術者だ」

「ほう……」

「ちょっとレグナ!？」

半泣きでポカポカ叩いてくるリースの頭を片手で抑える。

「……大丈夫だとは思うが『喰われる』なよ」

「……それほどか？」

「『九重の水破王を打ち消した』って言えばわかるか？」  
ヤマトノオロチ

「エンドクラスの魔術を？ なるほど……たしかに異常だな しか  
し 『警戒警報LV2を発令 結界に悪魔の接近を確認、繰り返し  
します」

警戒警報LV2を発令 結界に悪魔の接近を確認！』

「ちつ……またか 話の腰を折りよって……」

「なんだ？」

「悪魔さ このところ多くてな」

スティアは傍らの無線のスイッチを入れる。

「こちら『星の隷属者』だ 認証コード『765 T a A b y s  
L e S i n f o n i a E s 5 9 8 0』 守備隊聴こえるか？  
……OK、認証した 『大震』こつからはゼクウを出す それから『  
破壊者』を1人増援に行かせる 間違ってもそいつとは敵対するな  
以上だ、それまで持ちこたえろよ」

「アストラル……？」

「そいつは預かってやる、から代わりに私のために働け こちら猫  
の手も借りたいほど忙しいんだ」

「……わかった」

「待て、ウルスラグナは置いていけ」

「なぜだ？」

「それがお前の手元になれば我々はお前を止めるすべを持たん  
れなしでようやく対等だ」

レグナは少し考えたあと、

「わかった　じゃあリースに預ける  
勝手に変な研究に使ったら……」

魔封剣の一本を抜き払い『アストラル』の首に突き付ける。

「我々は貴様を敵に回せると思うほど傲慢ではないよ  
そら、さつさと行くがいい　こうしているあいだにも守備隊は傷を  
負っている」

本格的に泣き出しそうなリースを置き去りにしてレグナは走り出  
す。

「……さて、光の術者と言ったな？」

「っ………いつ、強い……！」

ヴァルクリフ守備隊は形勢不利だった。元々、力で悪魔に劣る守備隊は『呪縛の術式』を展開し動きを封じた上で掃討することを定石としていた。

が、おそらく集団の長であろうイグザードと名乗る翼のある悪魔が『呪縛の術式』を強硬突破したのだ。

「退避！」

たった一体の猛威を前に部隊長が叫ぶ。

（いける……！）

イグザードは確信した。この人数ならば『大震』が出てくるまでにカタをつけられる。『大震』はあとでノコノコ出てきたところを数で押せばいい。

「！ 新手か……」

そんな打算の中に1人の剣士が疾走してくる。

イグザードは術式を展開、風の大槍を発動しそれを迎え撃つ。が

……

ばきんっ

鈍い音を立てて風が、砕けた。

「っ！？」



4本の魔封剣を所持しているレグナには一切の純魔法攻撃が通用しない。

もし回避されても数秒は足を止めれるはずだ、そう踏んでいたイグザードの注意は既に半ば他の人間に向かっておりレグナへの対応は酷く緩慢なものだった。

ざくっ!!!

一閃。

たったそれだけで一部隊を苦戦に追い込んだ悪魔の腕が落ちる。

2 撃目      ！

イグザードはそれを回避する術を持たなかった。

…だから、もう片方の腕を盾にした。

「ぐっ……」

鮮血を撒き散らして腕が落ちる、が腕が邪魔になり剣速は鈍る。激痛が身体を跳ね回るが気にしている余裕はなく、イグザードは後方に翔ぶ。

当然人型の構造上、バックステップよりも前進のほうが速い。だがイグザードは魔術の助けを借りて自身の翼に風を浴び加速した。

イグザードは風に乗りそのまま上昇する。

（逃がしたか……）

レグナは咄嗟に魔封剣を投合しようとしたが既にイグザードは遙か上空に逃れていて追撃を諦めた。

2閃。レグナのリーチに入った魔物が唐突に崩れる。

（とりあえず残党のほうを狩るか）

守備隊と連携を取ろうかと周りを見たがどうやら既にこの場を離れているらしい。

「貴……様………？」

声がしたほうを向くと、ゼクウの後ろにいた女兵士が魔物に囲まれていた。

「待ってる！」

弾丸のような速度でレグナは疾走する。

魔物の包囲を崩す程度レグナには雑作もなかった。

ベル・バークライトは舌を巻いた。

彼女はヴァルクリフ第6守備隊の部隊長だ。だからこそ部下を退避させ自分は殿として残った。

腕にはそこそこの自信があった。

だが目の前の男はそのなけなしの自信を完膚なきまでに叩き潰した。

先ず最初に甲殻虫の硬い背を無造作に切り裂いた。メキィッという鈍い音に他の魔物が彼の存在に気付く。彼は先ず手持ちの剣の一本を投合した。ベルの真後ろにいた魔物の顔が潰れる。

魔物が爪や牙を剥き出しにする。

その瞬間、彼の姿がブレた。

消えた　　？

そう思ったときには彼は既にベルの隣にいた。

2体の魔物が血を噴き出して倒れる。

「安心しろ」

男はベルを庇うように立ち、言う。

「あんたには指一本触れさせん」

…惨劇が展開された。

「バカな……」

43体。イグザードと名乗った悪魔が引き連れてきた魔物の数だ。守備隊が倒した魔物の数は僅か10体。しかもそのうち4体はベルが一人で倒したモノだ。

残ったのは33体。それを、この男は一人で倒した？

「なんだお前はっ 悪魔か!？」

「……悪魔ならあんたを助ける理由はないだろ」

男は呆れたように溜め息を吐く。

息？

ベルは気付く。男の呼吸がほとんど乱れていないことに。

（こいつは息1つ乱さずにこれだけのことをやって退けたというのか？）

後退り、武器を抜く。

ベルには最早この男が悪魔にしか見えなくなっていた。

「わ…私は悪魔の奴隷になどならんぞっ！」

「……」

男は無言で剣を納め、それを支えていたベルトを外して手元の剣全てを鞘ごとベルの足元に放り投げた。

「これで信じて貰えるか？」

「っ……」

「俺はレグナ、流れの『破壊者』だ 『大震』の1人と知り合いで  
そいつに ってあんたさっきの…… っ!？」

男の肩が大きく動いた。

「!?!」

再び、男が消えた。

ベルがそう認識した瞬間に男はベルの足元の剣を拾い上げていた。

（殺られる……!）

思わず恐怖に目を閉じる。

しかし、予想に反してベルは自分の身体が浮かびあがるのを感じた。

「逃げるぞっ！ 掴まってろ」

怒声に近い声が響く。薄く目を開くと肩に担がれているのがわかった。

それから、

『吼える失墜の翼王！』

無数の真空の矢が周囲一体を撃ち抜いた。

「っ……！！！！ なんだこれはっ」

「逃げた悪魔だっ 上で魔法の詠唱してやがったんだ……！！」

矢を剣で振り払いながらレグナは疾走する。

（クソッ…… 1本じゃ上手く捌けねえ）

外れた矢で粉塵がまきあがり、更に回避を困難にする。

（どうする？ 他の剣を回収して、いや この魔法の属性は風だ……  
… ウルスラグナじゃないと、他の魔封剣じゃ折られるのがオチか  
結界の中までこのまま……？ 俺一人ならともかくこいつ担いだ  
ままじゃ持たないぞ……！！）

このままじゃ、当たる……！！

「あっはっは 苦戦してますね、レグナさん」

周囲の空気が熱によって発生する対流で、歪む。

「っ！」

「ちゃんと避けてくださいね？」

両手を広げて展開した魔方陣を回転させより大きな空気の渦を巻き込む。

「行きます」

『垣間見る地獄の業火』

『限り無き炎（バウンドレス・ファイア）』の異名を持つ震術師、ゼクウ・フィアレスの手によって、空が焰に染まった。

「……あれ もしかして、死んじやいました？」

なるべく上に放ったつもりではあったのだが、どうやら地表まで

ある程度の影響は出ていたらしく、背の高い草などは一瞬にして灰と化していた。あまりの高温で焼かれたため逆に火災にはなっていないようなのが救いか。

「ちょっと強すぎたか…… ちゃんと成仏してくださいね」

ゴンッ！

「い……ッタアっ!？」

鞘を側頭部をおもつきり叩かれて涙目でそちらを向く。

「ゼクウ……!」

レグナと、ベルが立っていた。その近くの地面に人間一人が入る程度の穴があいている。

（咄嗟に『矢』のいくつかを一ヶ所にはたき落として地面に穴を……  
それで『垣間見る地獄の業火』を逃れたのか）

「覚悟は出来てるよなあ……？ ゼクウ」

「え いや、ごめん マジ切れされると思わなくて……」

がくっ……

「っ……」

唐突にレグナが膝から崩れ落ちた。



「え…… レグナさん……？」

うつ伏せに倒れる。その背中には、ゼクウの術により酷い火傷を負っている。

「！ 嘘でしょ……？」

ゼクウはレグナの力量を知っている。自分程度の術なら漠然となんとかするだろう、と思っていた。

ゼクウは隣のベルが無傷なことに気付く。

（まさか庇ったのか……？ 感情のこもらない冷酷無比な、ただの『ブレイド』と呼ばれたこの人が……）

守備隊の隊長など使い捨ての駒の1つに過ぎない。それを……

「……ベル、彼を医務室のほうに運んでおいて」

「……は、はいっ！」

「もしもし、『星の隷属者』<sup>アストラル</sup> 聴こえる？」

「……ゼクウか どうした？」

「殲滅完了したよ でも僕の術で負傷者が出た、ナタクを回して欲しい」

『……珍しいな お前の術を受けた者が生きているのもそうだが、いつもなら必要な犠牲と割り切るのが貴様だろう？』

「……ゴメン」

『構わんよ 医務室に放り込んでおけ 手配してやる』

（後書き）

……前書きにラノベみたいなやつ入れてみた。

初見の方はごめんなさい……m（――）m

【戦人（ウォリア）】 魔物と戦うための訓練を積んだ人

【破壊者（バスター）】 上級悪魔や魔王を倒した経験のある戦人

【震術（しんじゅつ）】 いわゆる魔法。大気を震わせて摩擦により炎や雷を生み出し攻撃する。他に“震動”その物を使う『無属性』が存在する。ほんの一握りの選ばれた術者は『光』を使えるとかいう噂

【魔術（まじゅつ）】 いわゆる魔法。周囲に存在する分子を操り攻撃する。ほんの一握りの選ばれた術者は『闇』を使えるとかいう噂

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2441h/>

---

BLADE 4 『リトルブレイバー』

2010年11月10日14時13分発行